

津久見市の小児医療・小児保健の向上を目指して

こどもの病気対策法

新型インフルエンザ編

大分大学地域医療・小児科分野 是松 聖悟

新型インフルエンザの流行期に入りつつあります。8月最終週の定点あたりの患者数は大分県が沖縄県に次いで全国第2位です。弱毒で、ほとんどの人が軽症のうちに治癒しますが、抗体がないため、感染力(患者1人から感染する人数)は2.0-2.3人(季節性は1.3人)、致死率は0.3-1.5%(季節性は0.1%以下)とされており、注意が必要です。8月25日までに、日本で427人が入院し、半数は20歳未満、また、喘息を含む呼吸器の病気を基礎に抱えている人の重症化が目立ちます。

季節性インフルエンザと同じく、鼻の奥を綿棒で擦って調べる抗原検査は、発熱初日には陽性になりにくく、最も検出率の高い2日目も40-80%程度の陽性率です。それをもってインフルエンザを否定することはできません。この場合、検査を繰り返すより、医師の診断に従うことをお勧めします。

治療薬として使用されるタミフル[®]は、1日早く熱を下げる効果がありますが、肺炎や脳症への予防効果はないとされています。さらに1歳未満の安全性は確認されてお

らず、また10歳代の精神症状との因果関係もまだ不明です。で、これらの世代に対しては、有益性が危険性を上回ると判断した場合に限ることが推奨されています。そもそも、生来健康で軽症な人へのタミフル[®]は推奨されていないこともご承知おきください。また、リレンザ[®]はタミフル[®]の使いにくい10歳代で特に使用されていますが、喘息発作を引き起こすこともあることを知っておく必要もあります。

現在、発症や重症化の予防が証明されているのはワクチンのみですが、新型インフルエンザワクチンは今年度末までに1800万人分しか生産できず、インフルエンザ診療にあたる医療従事者、妊婦、基礎疾患を有す人(中等症以上の喘息、慢性呼吸器障害、心不全、腎不全、悪性疾患、移植後、脳性麻痺などの発達障害、早産児、先天代謝異常)、11歳から就学前までの幼児、乳児の両親が優先となります。うがい、手洗い、咳エチケットに努めるとともに、季節性インフルエンザワクチンを接種して、優先者においては、新型インフルエンザワクチンの接種もお勧めします。

新型インフルエンザの基礎知識

- ・ブタ由来のA型H1N1。
- ・潜伏期 1-7日(季節性は2-5日)。
- ・感染力(1人の患者が感染させる人数) 2.0-2.4人(季節性は1.3人)。
- ・5-19歳が発症者の58%を占める。
- ・季節性に比べ、肺炎になりやすい。
- ・慢性疾患(特に喘息を含む呼吸器疾患)を患っている人が重症化しやすい。
- ・妊婦も重症化する傾向がある。
- ・致死率 0.3-1.5%(季節性は0.1%以下)。
- ・インフルエンザ抗原迅速検査は発熱初日は陰性のことが多い。発熱翌日の検出率が最も高いがそれでも40-80%。
- ・タミフル[®]は、解熱までの期間を1日短縮させるが、肺炎や脳症の予防効果は乏しい。1歳未満の安全性は不明で、10歳代は精神症状を来す可能性があり、治療による有益性が危険性を上回ると判断したときに処方。
- ・リレンザ[®]は喘息発作を引き起こすこともある。
- ・ワクチンは、発症、重症化の抑制効果あり。インフルエンザ患者を診察する医療従事者、妊婦、重篤な慢性疾患、1歳-就学前の幼児、乳児の両親に優先接種。

